慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハイマン・ カブリン著 アジアの革命家 : 片山潜の生涯
Sub Title	H. Kublin; Asian revolutionary, the life of Sen Katayama
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.4 (1965. 4) ,p.321(79)- 327(85)
JaLC DOI	10.14991/001.19650401-0079
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650401-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Minutes. (Documents of the First International) 1964, pp. 35-36.
(2) Ibid., p. 40.
(3) Ibid., pp. 44-45.
(4) Ibid., p. 52.
(5) Ibid., p. 52.
(6) Ibid., p. 56.
(7) Ibid., p. 58.
(8) Ibid., p. 65.
(9) Ibid., p. 48.
(10) Ibid., p. 91.
(11) Ibid., p. 55.
(12) Ibid., p. 60.
(13) Ibid., p. 63.
(14) Ibid., pp. 74-75.

――一九六五・二・一五・深更――

書評

ハイマン・カブリン著『アジアの革命家――片山潜の生涯』

(Prof. Hyman Kublin; Asian Revolutionary, The Life of Sen Katayama, Princeton, New Jersey Princeton University Press, 1964, xiii+pp. 370.)

飯田鼎

「われわれは、どのような目的をもってアメリカへくるのか。お金をためるためか、それともアメリカ見物を楽しむためか。いやわれわれはすべての中国人やハンガリア人がやるように、お金をもうけるためでもなければ、また楽しい思いをするためでもない。そんなことはわれわれには関係はないのだ。なぜならわが国は、政治的宗教的な諸問題において、もっとも重要なもっとも忙しい時期にあり、あらゆる憂国の士を必要としているのだ。われわれは、祖国のために、その将来の利用にそなえて、われわれの精神を教育し且つ教養をつむためにも、より高度の文明についての真の知識を獲得する目的で、この国へ来るのだ。」（片山潜「何故われわれは、アメリカへ来るのか。」本書六四頁）。

一

日本が生んだ偉大な世界的革命家、片山潜については、第二次世界大戦後、わが国でも非常に熱心な研究がつづけられている。まず片山の著作についていえば、一九四九年に、一九二二年に出版されたことのある「自伝」が、日本共産党史資料委員会監修になる「片山潜選集」第一巻として刊行されたが、その後、一九五四年、岩波書店から片山潜「自伝」として出刊された。今日、一般に片山の自伝といえばこの岩波版を指すと思われるほど普及している。また片山と西川光次郎の共著になる「日本労働運動」（岩波文庫）も一九五二年に出版され、日本労働運動の研究に大いに役立つこととなったのである。また一九五九年、片山潜生誕百年記念として、片山潜著作集（全三巻）が、平野義太郎、木村毅両氏を監修者とし、大原慧、塩田庄衛、隅谷三喜男、長谷川博、藤井松一、松本惣一郎、宮川寅雄、山辺健太郎、渡部義通、加藤佑治の諸氏を編集委員として河出書房新社から出版され、片山の主要著作を網羅していることは注目に値する。それと同時に、労働運動史研究会は、その機関紙「労働運動史研究」第十八号（一九五九年十一月）に、片山潜生誕百年記念特集号（大月書店）を計画して、その輝かしい生涯を記念している。

戦後におけるわが国の片山潜研究は、岸本英太郎教授および隅谷三喜男教授を中心としてすすめられてきたといっても過言ではない。すなわち岸本教授の場合には周知のように、「資料日本社会運動思想史」の刊行に努力しつつある編纂委員会のなかでの、明治・大正期の史料の蒐集および整理という先駆的な役割を通じての研究によって、片山に近づいていかれたわけである。そしてその成果

は、すでに一九四九年、「片山潜の都市社会主義・我社会主義」[2]となってあらわれ、また一九五九年には、渡辺春男、小山弘健両氏との共著「片山潜」[3]となって結実したわけである。

また隅谷三喜男教授は、日本における賃労働史にかんする先駆的な労作をへて、労働者状態史および労働市場論の分析に鋭意専心しておられるが、厖大な「日本労働運動史料」の編集委員として活躍されるなかで、近代日本の思想家としての片山潜[4]に到達されたようである。岸本氏らの包括的な研究と隅谷氏とのそれとでは、問題の視角からいっても異なった面がみられるが、ともかく、この両者は、片山潜の伝記としてはそれぞれわが国における代表的なものというべきであろう。ところが、この度、日本の労働運動史にかんしてすぐれた業績を発表しつつあるブルックリン大学教授ハイマン・カブリン博士によって、片山潜にかんするきわめてすぐれた研究が完成されたことは心から喜びに耐えない。

ハイマン・カブリン博士は、「明治労働運動史の一齣——高野房太郎の生涯と思想」[5]と題するまことにユニークな著作によって、わが国の労働運動史研究者の間に有名である。高野房太郎の生涯にかんするこの研究の「あとがき」に、早稲田大学の入交好脩教授が記しておられるところによれば、カブリン博士は、一九一九年、ボストンに生まれ、一九四七年ハーヴァード大学を卒業されたが、その学位論文は、小笠原諸島をめぐる日米交渉史であったといわれ、その後、明治初期の日本の社会主義運動に注目せられたわけである。一九五五年には、日本労働運動史の研究を目的として、フルブライト研究教授団の一員として、早稲田大学に在籍され、そこでの研究成果が、高野房太郎の研究となって結実したのである。

わたくしはかつて、この書をよみ、高野房太郎が、黎明期日本の労働運動において果した役割を、正しく評価しようとするアメリカの研究者の存在に驚異を禁じえないものがあった。そしていま、カブリン教授による「アジアの革命家——片山潜」をよんでその感をひとしお深くしたものである。この書を読む者は高野とほぼ同時代に活躍し、おなじくアメリカ労働運動の根強い影響のもとで、日本の労働組合運動の組織者としてのスタートをきった片山にたいする、著書のなみなみならぬ愛着と共感とを感ずるであろう。筆者は著者のように日本の人間と風土に親しみをもつ研究者によって、片山の研究がすすめられていることに深い喜びとともに尊敬をもおぼえるものである。以下にその読後感ともいうべきものをつづることとしよう。

（1）これは改造社版で、その前に雑誌「改造」に連載したものを一冊にまとめたものである（これについてはあとでのべる）。

（2）片山潜「都市社会主義・我社会主義、岸本英太郎氏解題（実業之日本社）。

（3）岸本、渡辺、小山、「片山潜」（全二巻）、未来社、一九五九—六〇年。

（4）隅谷三喜男「片山潜——近代日本の思想家——」東京大学出版会、一九六〇年。

（5）ハイマン・カブリン編著「明治労働運動史の一齣——高野房太郎の生涯と思想——」、有斐閣一九五九年。これについては、筆者もかつて書評を試みたことがある（三田学会雑誌、第五三巻第一号拙稿書評参照）。

二

著者は、その序文においてつぎのようにのべている。

「片山にかんする真に満足すべき伝記が、いまだかつて書かれたことはなかった。この日本の革命家は放浪者であった。彼の成年以後の年齢の三分の二は、アメリカ合衆国、西ヨーロッパ、メキシコおよびソヴェト・ロシアなどで過された。この卓越と不明瞭の彼の生涯の時期において、その痕跡を追うことは、非常に骨の折れる、そして時として挫折を蒙りやすい仕事である。そして、片山の厖大な著作や個人的な記録——それらは、図書館、研究所や三つの大陸の私的な蒐集のなかにちらばっているのであるが——は、片山を研究しようとするもっとも熱心な人々や讃美者の熱情をさますに充分であった。」

この一節のなかに著者のこの研究を完成する上での苦労、困難がにじみ出ていると思う。

「ミカエルおよびバーバラだけでなく、わたくしの妻にとっても、片山の名前は文字通り、家庭の言葉となった。忍耐と寛容の三本の柱として、彼らは、いく度も、この本のすべての言葉を読んでくれた……。」

これをみても、カブリン教授とその家族たちの本書にたいする期待と愛情がどのように深いものであるかを理解することは困難ではないだろう。本書は、つぎのような内容から成っている。

序文
プロローグ
一、家系
二、青年時代
三、東京での生活
四、アメリカでの苦闘
五、アイオワにおける学生時代
六、アンドウバーとイェイル
七、帰郷
八、労働運動の組織者
九、社会主義の煽動者
十、平和主義と戦争
十一、寂しい年月
十二、いまひとたびのアメリカ
十三、社会主義の終焉
十四、ボルシェヴィズムに向って
十五、共産主義インターナショナルとともに
十六、旅路の果て

片山の全生涯をきわめて克明に辿っており、とくに注目すべきは、片山にかんする内外の研究文献と、片山自身の著作についての丹念な蒐集と、これにもとづく検証の結果が本書の至るところにに

じみ出ており、とりわけ、片山にかんするわが国の研究文献を非常に広範囲に渉猟しているのには全くおどろかされる。著者の片山研究の執念とでもいった方がよいと思うほどであり、さらに魅力ある文章は、読む者をして最後までとらえてやまない。

本書は、どのような点に特徴をもっているであろうか。これを正しく評価するためには岸本教授ら三氏の共著になる片山の伝記的研究と隅谷氏の手になる簡潔な片山の伝記とを対照させつつ論ずることが面白いと思う。筆者はかつてこの両書を紹介批評したことがあるが[1]、いまカブリン教授の片山潜の生涯をこれに加えるならば、三種三様の独特な個性が印象的に感じられるのである。

岸本教授の労作は、第一部の序文にのべられている如く、「その方法論上の立場からも、片山の個人的行状を微細にわたって追うていくということは、私たちの最初からの意図ではなかった。むしろ近代労働運動史における片山潜の位置づけ、すなわち日本と世界の労働者解放の歴史においてかれの思想と行動がもった意義と役割を、それぞれの時期なり情勢下について具体的にみていくことに、私たちの仕事の重点があったわけである」とのべられているように、第一部は主として、日本の労働運動における片山の役割、とりわけ、幸徳秋水らの直接行論者にたいする労働組合主義の主唱者としての彼の役割に主として光をあて、第二部においては最後の渡米（一九一四年）以後、晩年の片山を、ラッサール主義からボルシェヴィズムへの転換、さらに共産主義者としてコミンテルンの執行委員としての輝かしい活躍などに力点がおかれているのは、けだし当然というべきであろう。

ところが、隅谷教授は、その「片山潜」の「あとがき」において、「それゆえ、片山に関する従来の研究がしているように、片山の歴史的意義を、労働運動史や社会主義運動史の中に、あるいは社会思想史の中に位置づけるという方法をとらず、片山の思想自体の発展を片山の生活に即しながら全体的に追求するという途をとった。このような視点に立つと、コミンテルンの指導者としての片山は、考察の対象としては余り興味がない。本書の叙述がソ連における片山に殆んどふれていないのは、資料的な制約のほかに、このような視点からくる当然の結果であった」とのべているのは、まことに対照的である。

このような二つの研究に比較すると、カブリン教授のこの研究には、つぎのようないちじるしい特徴がみられるのではなかろうか。

まず、片山の人間形成の土台ともいうべき故郷での幼少年時代、および上京後の生活、そして一八八四年（明治十七年）渡米して労働しながらのアンドーヴァおよびイェールにおける勉学という青年時代に、本書全体の三分の一に近いスペースを割いていることが注目されよう。著者は、アメリカ人として、片山の足跡をくまなく辿ることができるという有利な条件を利用して、従来、片山の生涯のなかで明らかでなかった在米時代の幾多の事実を克明に追求しているのであるが、幼少年時代についても、日本滞在中、片山の生れ故郷、岡山県久米郡弓削村羽出木をおとずれ、多くの人々の談話やわずかに残っている資料をたよりに、彼を生み出した家族関係や周辺の人間類型というものを生き生きと描いており、著者は明治時代の日本農村の雰囲気をよく再現している。しかしながら、著者の片山潜研究において、もっとも注目すべき事柄のひとつは、片山の思想的遍歴と社会主義への転換期ともなったアンドウバー神学校時代について、きわめて簡潔に描かれていることである。

従来このアンドウヴァ神学校時代というのは、片山の生涯にとってきわめて重要な時期であるにもかかわらず、不明な点が少くないといわれる。大原慧氏の研究によれば、ソヴェートから最近おくられてきた自伝『草稿』は、一九二〇年二月十七日から二十四日までの約一週間のあいだに、アメリカ合衆国アトランティック市において書かれたものであるといわれ、ここには、片山の思想形成にとって重要であるべきアンドウヴァ時代がきわめて詳細に叙述されているにもかかわらず、自伝にはこの部分が全くぬけているのは何故かという疑問がおこってくる[2]。これについて著者カブリン博士はつぎのようにのべている。

「アンドウヴァにおける研究は、片山の生涯と思想に非常に大きな影響をあたえた。それにもかかわらず、彼がメリーヴィルおよびグリンネルでの彼の経験については、その自伝のなかで書いているけれども、アンドウヴァ神学校での数年については、完全に沈黙を守っている。それは奇怪なことではあるけれども、片山の伝記を読む者は、彼が主として挿話的な意見や、手当り次第のあてつけ（largely from parenthetical remarks and random remarks……との意味がよくわからない。著者の意味するところが理解しにくい――筆者）から神学校に入学したことを知っている。彼が、アンドウヴァでの彼の生活について追憶を失ってしまったのは、おそらくその自伝が、彼がキリスト教をすてて、マルクス的社会主義に転換した後、しばらくたって書かれたという事実によるものであろう[3]。」

しかしこの著者の説明には納得できないものがある。なぜなら、自伝の草稿が書かれたのは一九二〇年であり、自伝が最初にあらわれたのは、一九二一年（大正一〇年）の『改造』六月号で、以後、一九二二年一月まで、都合六回にわたって連載され、同年五月、改造社版『自伝』として単行本にまとめられたわけである[4]。もしそうであるとすれば、わずか一年の短い時期に、片山がアンドウヴァの生活について忘れてしまったのだという説明は到底納得しがたい。大原氏も適切にのべているように、これはやはり、自伝草稿の保管を依頼された石垣栄太郎氏が、これを全面的に改訂することをまかされた結果であることを除けば、おそらく片山が草稿をもとにして自伝を書くときに、何らかの理由で、アンドウヴァ時代の叙述を抜かなければならなかったということが考えられる。その理由が何であるかは判明しないのであるが、少くとも「忘れた」という可能性は少いようである。著者のご意見はどうであろうか。すなわち一九二〇年という年は、一九一七年ボルシェヴィキ革命の勃発という事実からしても、アンドウヴァでの生活を完全に忘れさせるほど遠くへだてられたのでもないからである。

それから著者は、片山が最後に渡米する前の日本の同志との意見

の衝突、とくに幸徳秋水との理論上の対立から感情的なもつれ、同志との疎隔そして最後に弾圧と窮乏化という一九〇六年から一九一四年までの数年を、第十一章に「寂しい年月」という題で書いているが、そのなかで、一九〇八年（明治四一年）六月におこった「赤旗事件」（"Red Flag Affair"）についてふれている。しかしこれは間違っている。というのは、著者によれば「大阪平民新聞の編集者森近運平の出獄を祝うために、神田の錦輝館において硬軟両派の（幸徳のひきいる金曜会とこれと対立する西川らの同志会をさす）歓迎会が開かれたと書かれているが、[5]これは森近ではなく、山口孤剣（義三）であることはよく知られている。[6]著者の思いちがいであることを指摘したい。

本書を読んで感銘をうけたところは少くないが、とくに第十三章「社会主義の終焉」は非常に面白かった。アメリカでの世界の同志との接触、とくに第一次世界大戦やロシア革命の渦まくなかで、次第にボルシェヴィズムに近づいていく姿が、きわめて感動的に描かれているように思う。本書についてのべるべきことは、まだたくさんあるのであるが、所定のスペースもつきてしまったので、最後に明らかに誤謬と思われる言葉上の問題にふれて、この書評を終りたいと思う。

片山の東京での生活をのべた第三章で、著者は、岡鹿門を、Oka Shikamon と書いているが、[7]これは Oka Kamon が正しい。またそのすぐあとで攻玉社を Kodama-sha とよんでいるが、[8]これは Kogyoku-sha とよむのが正しい。それから、第八章労働運動の組織者のところで、一八九七年（明治三〇年）の春、先駆者高野房太郎が、日本の労働者にあてた「職工諸君に寄す」は、Shokkō Shokun ni Yokosu[9]ではなく、Shokkō Shokun ni Yosu である。これらは、いずれも、日本語のむずかしいために著者がおかした誤謬であるが、一言させていただく次第である。なお蛇足ではあるが、片山潜著作集の編者のひとり、山辺健太郎氏は Yamanabe Kentarō ではなく、Yamabe Kentarō とよむ。これもまた日本語の複雑難解な例といえよう。

以上において、筆者は、著者にたいし、大変失礼な批判を試みたが、ともかく、充分な資料と文献そして片山の足跡をくまなくたずねられたその努力の結果、きわめて詳細な伝記が完成し、とくにアメリカでの一九二〇年前後の彼の活動が、非常に克明に追求され、その人間的な側面を生き生きと描いているのは、片山の研究を前進せしめたものであり、高く評価すべきであると思う。そのほか、本書をよむことによって筆者は、明治労働運動史への関心をかきたてられたことを著者に感謝したい。なお、日本の労働組合運動の特殊な性格、いわゆる企業内（もしくは企業別）組合（Enterprise-unionism）などの問題について、有益な示唆など与えられるとすれば幸である。また筆者が指摘した誤謬については、再版の折りに訂正されるよう期待するものである。（¥3,600）

（1）三田学会雑誌、第五四巻第四号拙稿参照。

（2）労働運動史研究会編集「労働運動史研究」（十八）所収、大原慧「片山潜の三種の自伝について」

（3）Hyman Kublin; Asian Revolutionary, the Life of Sen Katayama, 1964, p. 77.

（4）大原慧、前掲参照。

（5）H. Kublin, ibid., p. 203.

（6）片山潜「日本の労働運動」岩波文庫、一九五二年、三七三頁、および吉川守圀「荊逆星霜史――日本社会運動側面史」、青木文庫、一九五七年、一七六頁。

（7）H. Kublin, ibid., pp. 38, 41, 45.

（8）Ibid., pp. 38, 43.

（9）Ibid., pp. 105, 111-112, 120.

――一九六五・二・一五――

熊谷尚夫著

『経済政策原理』

――最近の類書も含めて――

加藤　寛

一

昨年から今年にかけて、「経済政策」に関する著書が続々と刊行されている。これは、二〇〇年にわたる経済学の研究が、現代経済機構のメカニズムについて、その性質をかなり明らかに分析した結果、その欠陥も明瞭にし、その是正策を考える段階にまできたことが、第一の理由であろう。第二に考えられる理由は、第二次大戦後、政府がかなりの政策実践力と計画力をもつに至ったことが、学界の興味を政策論に集中させたことであろう。外国では Kirshen & Others: "Economic Policy in Our Time", Tinbergen: "Central Planning" をはじめ、日本では、①山中・豊崎監修「経済政策講座」（全四巻・有斐閣）、②館・小宮「経済政策の理論」（勁草書房）、③熊谷「経済政策原理」（岩波書店）、④野田・加藤編「経済政策の型と解明」（中央経済社）、⑤今井・長州・清水編「日本経済政策の展開」（中央経済社）など、いずれも、ほぼ時を同じくして刊行されている。

これらの著書はもちろんそれぞれの特色をもっており、現在の経済政策論の水準を示すものであろう。①の山中・豊崎監修の「講座」は、方法論・理論・政策史・構造論と、政策論のあらゆる分野にわたっている綜合的なものだが、一つの問題を近経とマル経という意識的な区分によって論じているため、初心者には理解し難いという非難が当てはまろう。しかし、現在の学界の状況を端的に示したものとして評価できる。④の「型と解明」は各国の政策を通観・分析しており、⑤の「展開」は、マルクス経済学の立場から日本の経済政策を解明している。③の「理論」は財政・金融・貿易・独占問題を近経の理論から論じた異色のものであり、②の「原理」は、体系的に政策論の根本問題を扱かっている。